研究発表題目：津軽方言における長音から撥音への置換現象の音韻論的解釈

発表者：東京大学文学部言語文化学科　言語学専修課程 4 年　大槻知世

本発表では、音節方言とされる津軽方言で確認される、一見モーラ保存と似た現象の説明を試みる。津軽方言は東北方言の中でも特に音節方言的な性格が色濃く、特殊音（長音・促音・撥音）とりわけ長音は、「砂糖」/sado/、「空気」/kuki/のように短縮化する傾向がある。

しかし、単に長音が短縮するだけではない現象が 2011 年の青森県田舎館村における調査で確認された。川本（1992）らが既に青森県方言における語中長音の撥音化として紹介しているように、同地の方言では、長音が消えた部分に撥音が現れる。例えば「フーズ」は/huNzu/、「ちょうど」は/cjoNdo/となる。このような現象は、散発的には、津軽方言以外にも日本各地、例えば淡路方言や沖縄方言などで観察される。但し、津軽方言においては前鼻音を伴う本来の有声音に規則的に起こり、更に、「舅」の/t/→d のような二次的な有声音にも適用される場合がある。長音が消えて撥音が現れる環境は、基本的には前鼻音を伴う有声阻害音の直前であり、定式化すると次の(1)のようになる。

(1) $V \rightarrow N / V__{}^{n}C$

[+voice, -sonor]

（但し、N：撥音、^{n}C：前鼻音を伴う子音）

従来の記述では、津軽方言は音節方言であり、特殊音はモーラを投射しないものとして一括りに扱われてきた。しかし、大橋（2002）による音響音声学的調査の結果、特殊音の間でモーラ投射の度合いに差があることが明らかになった。大橋によると、長音が最も消えやすく時間的持続が不安定である。次いで促音、撥音の順に音声的な実現が安定していき、モーラ投射の度合いが高くなる。発表者が 2011 年に青森市で行った調査も、大橋の結論を裏付けるものであった。

本発表では、まず、(1)に定式化される事実に注目し、長音が消えたことによって浮いた長さを補うために、その X スロットが直後の前鼻音と連結され、撥音として実現したという仮説を検討する。この仮説に従うと、(1)に表される現象はスケルトン層での代償延長のように考えられる。しかし、津軽方言には既述の通りモーラを動機づける根拠が乏しい。本発表では撥音置換という現象を最適性理論によってより適切に説明でき、かつ制約の優先順位の違いによって他の方言・言語との違いも表現できることを主張する。

参照文献

大橋純一（2002）『東北方言音声の研究』317-394. 東京：桜楓社

川本栄一郎（1992）「青森県方言」平山輝男編『現代日本語方言大辞典一』76-84. 東京：明治書院.